

小大連携による紙芝居制作の試み（４）

中川 泰（長崎大学教育学部）
松永 恵介（唐津市立馬渡小中学校）
岩端 佳奈（鎮西敬愛学園小学校）
大野麻里子（西海市立西海北小学校）

I. はじめに

平成 23 年 7 月 2 日、3 日に「でてこい大きな紙芝居 2011」を長崎県美術館ホールで実施した。内容は紙芝居作品を映画館サイズの巨大なスクリーンに投影しサウンドストーリー形式で提示するものである。上演した紙芝居作品は小学生あるいは幼稚園児と大学生が共同で制作した 6 作品、大学生がパネルシアターから紙芝居にまとめた 4 作品、計 10 作品である。運営にあたったのは教育学部の学生、2 年の 29 名、4 年の 1 名、M1 の 1 名、教員 1 名、OB・OG 6 名（小学校教員 4 名、幼稚園教員 1 名、短期大学教員 1 名）、美術館スタッフ 5 名、計 43 名である。今回で小大連携による紙芝居制作〔註 1〕〔註 2〕は 4 年目であるが、参加したのは 6 校園（県内 2 校・2 園、他府県 2 校）である。来場数は同時に開催した実技のワークショップ「長大生とアートすると 2011」とあわせて、2 日間で 1302 名であった。

本研究は美術教育の領域で教員養成大学における小大連携および幼大連携の可能性と課題を明らかにするビジョンがある。参加する小学校と幼稚園の子どもに対して、普段の教育活動をより豊かにする活動、普段の教育活動にはない意味ある活動を保障したい。また、近い将来に美術教育を指導する教員となる学生に対して、子どもと関わる仕事の魅力や、やりがいについて学ぶことができるようにしたい。

今年度の小大連携は「既製の絵本を紙芝居に仕立てるプログラム」と「大学生が設定したキャラクターを小学生がデザインするプログラム」、幼大連携は「アーティストと小学生と大学生がコラボレーションするプログラム」〔註 3〕による教育実践である。

本研究は 6 校園の活動記録の成果を整理し、今後の小大連携および幼大連携のより良い方向性を模索することが目的である。本稿では「既製の絵本を紙芝居に仕立てるプログラム」による共同制作について扱う。

II. 唐津市立馬渡小中学校の活動記録

参加した子どもは複式学級1クラス7名である。内訳は3年1組3名（男子2名、女子1名）と4年1組4名（男子3名、女子1名）である。

紙芝居の制作は大学生から絵本『どうぞのいす』（文章：香山美子、絵：柿本幸造、出版社：ひさかたチャイルド、1981年）で「大きな紙芝居をしましょう」という連絡が入りスタートした。次に絵本の現物とともに、大学生が絵本を模写した下書きの絵、形だけをとった線描された画用紙を作成し、松永教諭へ届けた。メールで今後の活動を検討したが、送付した下書きの絵に子どもたちがただ着色をするだけでは、子どもたちが充実感を十分に得られないという結論がでる。松永教諭は小学生が下書きから着色までをすることを大学生に再提案し、大学生から快諾を受ける。その結果、子どもたちが主体となり相談をしながら5月末から制作を進めていくことが決まる。

松永教諭は子どもたちに制作の流れの説明をすると「ぜひ自分たちで描いてみたい」という答えが返ってきた。そこで『どうぞのいす』の絵を全く見せずに読み聞かせを実施したところ、子どもたちは想像力を働かせながら熱心に集中して聴くことができた。2回ほど読み聞かせを実施したが、「描きたい」という欲求が高まったのか2回目の読み聞かせの途中から何人かは既に紙にイラストを描き始めていた。具体的にイメージがまとまっていく子ども、背景などを細かく描いていく子どもも現れた。

6月に入り、それぞれの登場人物や背景の役割を分担しての下書きの作業が開始される。まず、試みに登場人物や背景を描いてみることになった。楽しんで活動に取り組んでいる子どももいれば、動物の具体的なイメージがわからなかったり、細部の表現が上手いかなかったりして、なかなか絵がまとまらず悩んでいる子どももいた。その際には図書室の図鑑や本を利用したり、松永教諭が補助的な絵を描くこともあったりした。何回も登場人物の絵を描き直す子どももいたが、それぞれが根気強く作業に取り組んでおり、結果的には子どもたち全員が満足のいく絵が描けたと感じている。

下書きをする際に子どもに意識させたのは「紙芝居を視聴する相手を意識したキャラクターの描き方」である。「小さな子どもたちが見て温かな気持ちになるキャラクターや背景を描こう」と最初に話があった。小さな子どもたちも対象ということで、相手を意識してどんな絵を描いたら良いのかについて丁寧に時間をかけて説明された。しかしながら、小学校3・4年生には相手を意識することが難しい。しかも、乳幼児用の絵ということ、子どもたちがどんな絵を描いたら良いのかを悩む場面が多々あり、それらに対応する松永教諭の細やかな気配りが見受けられた。

6月中旬に着色の作業が始まる。やわらかい色づかいやタッチになるよう、「最初に水彩絵の具をパレットにだし、絵の具を乾燥させてから水で濡らし、薄めて着色するように」という指導があった。子どもはそういった描き方が初めての体

験であった。「3原色に白と黒を混ぜ、様々な色をつくる」という色のつくり方の説明には最初戸惑った様子であったが、徐々に慣れ3原色に白と黒を上手に混ぜて色をつくりだし、濃淡などを工夫することができるようになってきた。自分の思った通りの色ができると何度も松永教諭に見せにくる子どももいて、色づくりを楽しんでいる様子が窺えた。結果的に『どうぞのいす』という作品の現物を子どもたちは観ていないので、その作品の現物の世界観を壊している可能性はあるが、子どもたちなりに『どうぞのいす』を解釈し、その世界観について話しあい、色やキャラクターを決め着色できたと考えられる。

子どもたちのコメントを以下に掲載する。

- ・「私は絵を上手く描けるかなと思いましたが、友達が手伝ってくれました。一番難しかったところは色を塗るところです。色も薄くしたところ模様がとてもかわいくなりました」
- ・「難しかったところはいくつかありましたが、とても楽しかったです。次からも絵をたくさん描いていきたいです」
- ・「下書きをするのはとても楽しかったです。色塗りが最初は下手だったけど、していると上手くなりました。松永先生に“上手くなったね”と言われました。絵や紙芝居を描くときは色に注意して塗りたいと思います。先生から色のつくり方や塗り方を教えてもらったのでこれから大丈夫です」
- ・「僕が楽しかったことは、絵の具で色を塗ることです。理由は色を青と黄と赤と白と黒でいろいろな色をつくったからです」
- ・「僕が頑張ったところは、自分の家にいるウサギの絵です。特に頑張ったところは地面の花です。いろいろな色を塗るところを頑張りました。とても難しかったです」
- ・「僕が一番工夫したところは風景やロバの頭です。なぜかという、後ろの風景がロバより遠いので、薄く塗るところを丁寧に塗りました。実際どんな発表になるのか楽しみです」
- ・『『どうぞのいす』を描いてみて、絵の具の色を混ぜたり、薄く塗ったりするところが難しかったです。でもみんなかわいく描いていたと思います。『どうぞのいす』は想像して絵を描くので、私にとっては描くのが楽しかったです。1枚1枚が3・4年生みんなで協力して完成させたので、小さい子どもたちに興味をもってその絵やお話を見たり聞いたりしてほしいです。とても楽しく描けました」

Ⅲ. 鎮西敬愛学園小学校の活動記録

参加した子どもは4年生63名である。内訳は1組32名（男子12名、女子20名）と2組31名（男子11名、女子20名）である。

紙芝居の制作は大学生から絵本『クレヨンにくろくん』（文章・絵：なかやみわ、出版社：童心社、2001年）で「大きな紙芝居をしましょう」という連絡が入

りスタートした。次に絵本の現物とともに、大学生が絵本を模写した下書きの絵、形だけをとった線描された画用紙を作成し、岩端教諭へ届けた。

岩端教諭は授業の導入で子どもに興味と意欲を喚起させるため、『クレヨンのくろくん』の読み聞かせを実施した。4年生ではあるが読み聞かせで、それぞれのクレヨンが描く音などに反応しながら楽しく真剣に聴くことができていた。特に花火のシーンは読み手の岩端教諭がドキドキ感を大切にしながら読み、他のシーンよりも時間をとって絵をよく見せると、「わあっ！」と声上がるなどの反応が見られた。お話を知っている子どもや同じ絵本を所有している子どももいたのであるが、高い関心をもって活動に入ることができていた。

今回の制作で採用するクレヨンによるスクラッチの技法を披露すると、「すごい！」「早くやってみたい！」という声が聞こえ、教室全体にワクワクしている様子が見られた。「下に重ねる色はなるべく多くの色を使った方が良い」ということと、「上に重ねる黒は端まで隙間なく塗りつぶした方が良い」ということが注意事項として伝えられた。

なお、小学校での活動は図画工作の授業時間に制作2時間の枠組みで計画されていた。絵本のシーンは1クラスに8つの班、2クラス16班に割り振られた。1つの班は3～4名で編成され、花火のシーンとそれ以外のシーンを担当する。花火のシーンはスクラッチの技法で1つの班に1枚、計16枚である。花火のシーン以外は1つの班が1～2枚を着色する。

大学生が描いた画用紙を渡すと、「上手！」「本物みたい！」と言いながら意欲的に制作活動を始めた。色を塗る活動は普段から慣れており、班のメンバーが協力し、はみださないように気をつけながら絵本を参考に塗っていた。

塗り終わった班から、スクラッチの制作に入った。みんなで協力して色を塗り、黒を重ねる段階で苦労したようだったが分担しながら作業していた。削って色をだす段階では夢中になって活動し、描いているうちにそれぞれがいろいろなアイディアをだしあい、班それぞれの持ち味があるスクラッチの作品を仕上げようと努力を重ねていた。上手く描けなかったところは上から再度クレヨンの黒を塗って描き直すなどの工夫も見られた。

完成した作品を鑑賞し、その仕上がりに自分たちなりの満足を感じることができていた。他の班の作品に「すごい！」「きれいだね！」と呟きながら、自分の班の作品に生かせるものを探していたことを思い出し、報告しあうことができた。今回の制作活動は子どもにとって、他の子どもから良いものを学び、自分を更に高めようとするものになっており、子ども一人ひとりがお互いに素敵な影響を与えていたと考えられる。後日、今回の制作活動を発展させ、宇宙を描きたいという要望があったとの報告を受けた。

子どもたちのコメントを以下に掲載する。

- ・「色を塗るのには苦労したけど、できあがった作品をいろいろな人が見てくれうれしいです」

- ・「クレヨンで色を塗ること、色を塗ったところを黒で潰すこと、潰した黒を削って花火のようにすることが楽しかったです。特に花火のようにするのは初めてで、やり方を知ってびっくりしました。でもやってみるとすごく楽しかった」
- ・「黒はいつも普通に使わない色なのに、とってもきれいな花火ができました。うれしかったので、またいつかやってみたいです」
- ・「この、『クレヨンのくろくん』の色塗りをしてみても楽しかったです。最初はめんどくさくて、厭だったけれど、私たちの班は指で擦ったり、広げたりしたら楽しかったです」
- ・「すごく面白くて色が好きになりました」
- ・「私は、『クレヨンのくろくん』の花火を描くところがとても楽しかったので、またしたいです。なぜなら、黒を削れば色がでてきて、とても面白かったからです」
- ・「“くろくん”のおかげで、とってもきれいな花火が描けたんだなと思いました」
- ・「小さいころから『クレヨンのくろくん』の絵本が大好きでした」

IV. 西海市立西海北小学校の活動記録

参加した子どもは2年生19名である。内訳は男子11名、女子8名である。

紙芝居の制作は大学生から絵本『11びきのねこ』（文章・絵：馬場のぼる、出版社：こぐま社、1972年）で「大きな紙芝居をしましょう」という連絡が入りスタートした。次に絵本の現物とともに、大学生が絵本を模写した下書きの絵、形だけをとった線描された画用紙を作成し、大野教諭へ届けた。

大学生の描いた下書きの絵に子どもが着色のみをすると、ただの塗り絵になってしまう危険性があり、子どもの高い達成感を期待できないと、大野教諭が判断した。そのため、大学生の描いた下書きの絵を参考に、下絵を新たに作成する制作活動へと変更された。小学校での活動は絵本の読み聞かせを実施することもあり、国語1時間と図画工作3時間の全4時間の枠組みで計画された。

前年度の3年生（現4年生）の取り組みを、兄弟姉妹から聞いている子どもも数名おり、自分の描いた場面が長崎県美術館で大きな紙芝居になって上演されることを知ると高い意欲を示した。

『11びきのねこ』の読み聞かせを実施し、大学生の描いた下書きの絵を“作品見本”として提示した。示された場面の絵を描くことを伝えると、初めは「難しそう!」「できない!」という子どももいた。しかし、見本のままではなく、自分で工夫して良いことや、描く方法も、紙に直接描いて着色すること以外に、別の紙に描いたものを貼りつける方法なども提示すると、徐々に「早く描きたい!」という子どもが増えてきた。描く場面は一人ひとりが気に入った場面を選ぶことにしたが、選ぶ理由は様々で、「単に簡単にできそうだから、この場面を選ぶ」という子どももいれば、「難しそうだからやってみたい!」という敢えて困難に挑戦しようとする子どももいた。また、「お話のここが好きだから…」というストーリ

一の内容で選択する子どももいた。

“お手本を見て場面の絵を描く”ということは2年生の子どもにはなかなか難しく、一人でどんどん描き進められる子どももいたが、そっくりコピーのように描こうとして上手いかない子どももいた。なかなか作業が進まない子どもの支援は、お手本に忠実でなくても良いことを伝えつつ、子どもらしい魅力をもった良い作品を紹介したり、お気にいりに描けた部分を切りとって張りあわせたりする方法を見せたりした。

少しの支援、例えば、全体の構図が上手くいっていない子どもに、部分を切りとって、別の紙に貼らせるなどをするだけで、「もうできないかもしれない…」と困っていた子どもが「なんだか上手くいきそう!」という気持ちに変わり、楽しんで絵を描き進められるようになったり、「案外上手く描けた!」と満足そうな表情を浮かべたりした。また、早くできた子どもは、進んでいない子どもの手伝い役やアドバイス役となって働いてくれた。そうすると、手伝ってくれた子どもに対する尊敬のまなざしが生まれたり、気に入るものが描けずに困っていた子どもも楽しく制作を進めることができたりし、両者にとって最良の学びあいの場ができた。ほとんどの子どもが授業の時間内で作品を完成させたが、未完成の3名は休み時間を利用することとなった。この3名は最後までお手本通りにこだわり、自分なりに描き進めることができなかった子どもたちでもあった。

完成した1枚1枚の作品は担当した子どもによって、ストーリーの順番で黒板に掲示されていた。徐々に増えていく黒板の作品を前に、子どもたちが胸を踊らせた。また後日、完成した作品をデジタルカメラで撮影し、学級に設置してある50インチの大型テレビを活用し、再度読み聞かせを実施した。子どもは自分の作品を画面で確認するときに、少し照れくさそうな表情を見せながら、うれしそうにしていた。それらのシーンが印象に残った。

自分が描いた感想に絞って、子どもたちのコメントを以下に掲載する。

- ・「ねこが11匹で、いっぱいいるから、すごく難しかったです」
- ・「描くのが難しかったけど、楽しかったです」
- ・「ねこがとても難しかったです」
- ・「友達に手伝ってもらってうれしかったです」
- ・「家のなかに、ねこを5匹描くのが難しかったです。はさみで、家や島を切るとき、かくんと曲がるところを頑張りました」
- ・「望遠鏡で、ねこが見張っているのが面白かったです」
- ・「友達が上手と言ってくれて、うれしかったです」
- ・「星をいっぱい描くのが大変でした」
- ・「とらねこたいしょうが魚に指をさすときの指が難しかったです。11匹のねこの手も難しかったです」
- ・「波をもっともっと大きく描きたかったです」
- ・「みんなであわせて見て、うれしかったです」

- ・「なかなか気に入るのができなかったけど、何回も描いたら、最後に上手にできて、すごうれしかったです。一番頑張りました」
- ・「ねこの顔を頑張りました」
- ・「もっとしたいです」
- ・「頑張って丁寧に描きました」
- ・「魚を頑張りました。魚のひもを描くのが難しかったです」
- ・「くろねこたいしょうだけしましまで、難しかったです」
- ・「たくさん描きたいところがありました。上手にできました。みんなであわせた
ら、もっとすごかったです」
- ・「色塗りを頑張りました」
- ・「美術館で見るのが楽しみです」

次に友達の作品を鑑賞した感想に絞って、子どもたちのコメントを以下に掲載する。

- ・「Iさんの、おじいさんのねこがすごかった」
- ・「Sさんの、星を描くのが難しそう」
- ・「Rさんが、山を描くのをすごく頑張っていました」
- ・「Hさんのが上手で、魚や、音符が、すごいと思いました」
- ・「Kさんの、ねこを囲むところがすごいと思いました」

V. 考 察

松永教諭は実践に際して、絵本のオリジナルあるいは大学生の下書きを封印し、動物や風景のデザインを子どもに任せ分担させたことにより、作品全体として統一感を失ったことを指摘している。また、完成させた下書きを子どもが分担し、それぞれが場面の色塗りにとりかかったので子どもによって配色の違いや色の濃淡の違いがあったこと、指導が徹底できずに何度か塗り直しを命じたり、強引に重ね塗りをしたりする場面が多々あったことを報告している。

しかしながら、7名という少数の子どもによる活動であり、デザインの役割分担や絵の修正や指導に成功している。もしも今回の状況で40名に近い子どもの取り組みであれば、作業は速かったかもしれないが、收拾がつかず紙芝居の作品が完成することはなかったかもしれない。

色の側面で問題はあったが一定の成果もあった。色を塗る過程で赤・青・黄・白・黒を上手に混ぜて、多様な色をつくることを指導したことについて、期待した以上に色づくりに興味を覚えた子どもがおり、色塗りでも充実感を得ていた子どもがたくさんいたのである。思っていた色をつくることができ、それを塗ったときに喜びを感じることは大切なことである。

松永教諭は当時、体育大会などの行事もあり、1週間に図画工作の時間は2時間をとるのが精一杯でなかなか作業が進まなかったことも含めて大学生に詳細な内容を伝えてくれていた。大学生は子どもたちの一生懸命な取り組みを知り、紙

芝居の作品の完成に子どもたちが充実感と達成感を感じていることを実感することができた。小学生と大学生のつながりは良好なものとなり、長崎県美術館での公開の初日の上演に小学生が主役として参加することになった。天候が少しでも荒れると欠航してしまう1日数便の船が唯一の交通手段の離島を早朝に出発し、片道3時間余りをかけての移動後、大学生とのリハーサル、本番で発表してもらうことができた。2日目は大学生のみの上演になった。1日だけの小学生と大学生の交流の場となったのであるが、小学生は自分たちの取り組みに対して達成感をより高めることができたのではなかろうか。一方、大学生は発表自体を楽しみにしている子どもが多かったことと、松永教諭が学校と保護者を説得した熱意を実感することができたのではなかろうか。

僻地に住む子どもにとって、都会にある美術館での発表は教育的意義が認められる。しかも子どもの期待も大きい。今後の交流のあり方について、より充実させる方向で模索する必要がある。

岩端教諭は今回の制作活動が簡単で取り組みやすく美しく仕上げるができる内容であったとしている。子どもは楽しく活動し、完成した作品に達成感を感じることができている。しかも班で1枚を制作することによって、みんなで協力して作品を完成させる喜びを体験することができている。

自分たちが協力して一生懸命につくった作品が映像になることは普段ではありえない。後日、長崎県美術館で上演した様子をDVDにまとめ、小学生に視聴してもらうことを計画していた。

子どもたちは自分たちの制作した作品が、大学生によって、ナレーションがつき、音楽がバックに流れ、子どもたち自らがアニメーションをつくったような雰囲気を感じることができるのではなかろうか。更に、長崎県美術館に集まった多くの子どもたちが熱心に視聴するシーンを目の当たりにして大きな驚きと、うれしさを感じてくれるのではなかろうか。

遠隔地の小学生と大学生の交流は難しい。小学生の数が多いと長崎に招きたくても実現できない。自分たちが制作した作品が大学生の手を経て、どうなったかを直接見ることができない場合、口頭だけの説明ではなかなか実感が得られない。しかし、上演の様子、鑑賞者の反応をDVDで確認できるようにすれば、遠隔地であっても作品を通して多くの人に感動を与えられるということを実感することができる。

大学生は花火のシーンを取って下書きをせずに、子どもの自由な発想で描いてもらうことに決め、全部の班の花火の絵を送ってもらい、それぞれの良いところを採用することにした。岩端教諭はスクラッチのシーンが僅かであり、子どもが制作した作品の全てが採用されないことを踏まえて、大きい紙に全員で制作し、紙芝居をする段階でそのシーンだけ本物を見せるということをする、制作した子どももより達成感が得られ、紙芝居を鑑賞する子どもにも感動がより大きかったのではなかろうかと感想を述べている。「自分たちのオリジナルの作品をつくつ

てやってみたい」という子どもの感想もあり、子ども自らが考えたストーリーを映像化する可能性を模索する必要性を感じた。

今後、紙芝居だけではなく、普段の授業で子どもが制作した作品を映像化して鑑賞する場を検討していかなければならないであろう。作品を映像化し鑑賞することで、自分の作品も他の人の作品もより興味をもって観ることにつながるからである。小大連携の場でこそ、いろいろな活動が実現し、多種多様な応用ができる可能性がある。

岩端教諭は子どもたちが自分たちの作品をDVDで鑑賞する時間を提供した。子どもたちは多くの長崎の子どもたちに感動を与えたことを知ることとなった。小学校では大きなスクリーンで見せることができなかつたようだが、テレビ画面に映しだされるという、普段とは違う鑑賞方法は効果があったと報告を受けた。自分たちがつくった作品がでてくると目を見あわせて合図をしたり、クレヨンたちの描く音が2回繰り返されているところで面白がったりという反応が見られたという。花火のシーンは特に反応があり、歓声が上がっていたようだ。子どもの感想に「本当にしゃべっているみたいだった」「大きいスクリーンで見たかった」「たくさんの人から見てもらってうれしい」「またやってみたい」というものがあり、鑑賞の時間が教育的意義の高いものであったことを示している。

大野教諭からは昨年度と同様に、子どもたちが遠くにある美術館を身近に感じることができたとの喜びの言葉をもらうことができた。他の人に鑑賞してもらうという目的をもつての活動は子どもに見通す力を要求する。

低学年の子どもにとっては簡単な活動ではなかつたが、一人ひとりが「お気に入りをつくりたい!」と意欲的に取り組むことができた。苦勞した子どももいたが全員に「できた!」という達成感があり、どの子どもも自信をもって自分の絵を他の人に見せることができた。

得意な子どもが不得意な子どもを手伝ったり、アドバイス役になってくれたりしたため、良好な学びあいに発展し、最適な協力の場が発生した。手伝った子どもにとっては自信につながり、手伝ってもらった子どもも、「〇〇さんが一緒に考えてくれた!」と大きな喜びを獲得することができた。「〇〇さんすごいね! 名人ね!」という言葉が飛びかっていたことは、普段の図工の授業とは少し違つたところの特別な感覚での取り組みになっていたことを示しており、子どもたちに新鮮な感覚を醸成したと評価できる。これは昨年度の取り組みと比較して、子どもの描いた場所が明確であることによる。

一方、大野教諭は子どもがどんなものに仕上がるのかなというワクワク感や、期待感、子どもののびのびとした豊かな発想を十分にひきだすことができなかつたと指摘している。子どもに「こう描かなくちゃ」という感覚が大きかつたのかもしれない。

VI. まとめ

本稿で扱った「既製の絵本を紙芝居に仕立てるプログラム」による小大連携および幼大連携の今後の具体的な手立てを考えたい。

小学校の教員の一人が「もっと打ちあわせを行い、大学生と協力をしながら進めていけば良かったという反省が残る」と記した。実際には大学生とメールでの交流を中心に、許された状況における最大限の仕事を果たしている。連携による交流の場を密にすることは大切だが限界がある。

具体的なフィールドの場でその都度、幼児だけではできないこと、小学生だけではできないこと、大学生だけではできないことを明確にしなければならない。そして、小学生と大学生とのつながり、幼児と大学生とのつながりを凝集性の高いものにすることが最も重要であろう。

今年度の事例を再考すると、時間や距離の制約があつて難しいが、絵本を選ぶ段階から、子どもが少しでも介入できれば、更に作品に対する想いが強まったであろう。少なくとも大学生が選んだ複数の絵本から小学生が選択できる余地があれば良かったと考えられる。

大学生の描いた下書きの絵の扱いをどのようにするかを検討することで今後の活動の質を高めることができる。大学生の描いた下書きの絵をお手本として扱うと、子どもの意識が自分たちもそっくりコピーのように描きたい方向に傾くリスクがある。なお、大学生の描いた下書きの絵を見せずに描かせることは子どもの人数が多い学校では厳しいものがあるし、小学校低学年や幼稚園では無理がある。

大学生の描いた下書きの絵の扱いは具体的な複数の方法として大学生に提案させる必要がある。そして連携する小学校あるいは幼稚園の教員と協力し、複数の方法から、子どもがのびのびと自由に描くことができる適切な方法を選択することができるようにしなければならない。

つまり、「既製の絵本を紙芝居に仕立てるプログラム」〔註3〕は“②小学生が取り組む1つの絵本を決定する”の選択者が大学生でなく小学生であること、また、“③大学生が下書きを行う”の下書きの扱いそのものが大学生と小学校教員によって決定されることが重要になってくる。

[註]

- 1) 中川泰・山川昭大「小大連携による紙芝居制作の試み(1)」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部)第9号, 2010年, pp.99-107.
中川泰・山川昭大「小大連携による紙芝居制作の試み(2)」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部)第9号, 2010年, pp.109-117.
中川泰・松崎としよ「遠隔地を結ぶ小大連携の取り組みについて(1)」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部)第9号, 2010年, pp.119-128.
- 2) 中川泰・山川昭大・松永恵介・大野麻里子・毘正子・宮崎友理子「小大連携による紙芝居制作の試み(3)」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部)第10号, 2011年, pp.79-88.
- 3) 前掲書2) pp. 87-88.